ヒンドゥー教の社会経済の発展構造

―J. H. ブーケの「二重経済論」を手がかりに―

吉備国際大学　大下朋子

現在、経済のグローバル化の中で中国に続いてインドにも発展が見られ、先進国がこれまで先頭を走ってきた工業経済あるいは情報経済の発展による市場経済化が躊躇を見せているのに対して、いよいよ経済的にも「アジアの時代」がやってきたことが明らかになってきた。ただ、古代西欧にとってオリエントという言葉が示し、文明の光は東方から来ると語られていたように、すでにかつてのアジアは経済的にも文化的にも豊かで安定した地域だったと考えられる。ところが、近代科学技術を基盤とする工業経済および市場経済によって社会経済の発展を遂げた西欧から、産業革命期から１９７０年頃までの日本を除くアジア全体は「停滞のアジア」と呼ばれて、工業化や市場経済化とは無関係で経済発展など出来ない地域と考えられていた。こう考えると「アジアの時代」とは、「停滞のアジア」という先進国の見方に修正を迫るだけではなく、かつて経済的にも文化的に豊かだった地域の再考を必要としている時が現代ではないかということになる。というのも、西欧人が経済の拡大にともなってアジア、とりわけインドや東南アジアまでやってきた人々の中に、西欧の工業経済や市場経済は確かに科学技術を基礎に自由競争によって利益獲得する社会経済に強さを認めたが、それが必ずしも地球や自然にとって最適ではなく、むしろその発展の結末は西欧人を生存の危機に陥れるものとする見解を主張した研究者たちがいたからである。ここで安全･安心な社会経済という方向性を、つまり、持続可能な社会経済が考慮されなければならない今、すでに工業経済や市場経済の発展に一定の考慮を払いながらも、アジア地域がもつ経済や文化を破壊するのではなく、しっかりとその地域に定着してきた社会経済や文化、そして宗教を調査･分析した研究者の見解を取り上げたいと考える。その代表的な研究者の一人に、インドネシアの農村社会を研究し「二重経済論」を唱えたオランダの経済学者 J. H. ブーケ（J.H.Boeke）がいるが、ここではまず彼の議論を参考にし、そしてこれを基礎にインドのヒンドゥー教の社会経済の発展構造を取り上げたいと考える。

１９１０年代にライデン大学を修了した若きブーケは、当時オランダが統治していたインドネシアに渡り、金銭が掛からずとも実質的生活が維持されている農村社会の経済に焦点をあて、すでにアンペイド･ワークやシャドウ･ワークのような「サブシステンス経済」subsistence economy を見抜いていた。しかも、西欧生まれの工業経済や市場経済がインド

ネシアの村落経済と接触した結果、「資本主義経済」と「非資本主義経済」との併存した二重経済が成立したと主張した。これを現代的に表現するならば市場経済と非市場経済となるが、その特徴を整理すると以下の４点となる。第一は家族や地域などの血縁的･地縁的･宗教的な村落共同体に人々が生活していること。第二は村落共同体の産業は工業や商業ではなく農業が中心であること。第三は共同体の維持は人々が働くことだけではなく祖先を祀ったり収穫を祝ったりする「休息」、つまり非産業的な活動も非常に重要であること。第四は共同体の中で人々はそれぞれが自由なのではなく、有機的に組織されて一体的な連帯組織となっていること。こうした特徴に基づいて東洋社会では、必ずしも都市と農村は対立的なものではなく、前者は宮殿や宗教施設、軍隊などが集まっているだけで村落の一部に過ぎず、また人々の欲望は無制限に発揮されるものではなく、共同体内の社会規範に基づいた「制限された欲望」でなければならない特徴を明確化したブーケは、とりわけ村落共同体で必要となる仕事や作業が相互協力でしかも義務となっていることを指摘する。また、彼が前期ないし初期資本主義と呼び、農村と都市とは機能的に分離しつつ発展した西欧の中世とは違って、この東洋の共同体内では、貧困や疾病など社会的に弱い立場に置かれた人々に対して相互援助･支援までがなされ、それらが機能的に分離せず、産業と文化、そして宗教などが有機的に融合し、土着化した社会経済が形成されている点を強調している。

こうした「二重経済論」でもって東洋社会を分析しなければ、その理解に失敗するというブーケの主張は炯眼に値する。そして、すでに指摘したように著者は、インドネシアを含めたアジア社会、とりわけ現段階で約１２億の人口を抱えながら、その約８割がヒンドゥー教徒であるインドの社会経済を取り上げたい。というのはブーケも指摘していたように、インドのヒンドゥー社会は南アジア一体に広がるモンスーン気候を基礎とする農業経済を根底にし、しかも行為の善悪をヒンドゥー教に依拠した社会的規範をまだ人々の生活にしっかり息づかせている社会経済だからである。ブーケもインドについては少なからず関心を持っていたらしく、カーストに関する指摘をしたり、指導者 M.K.ガンディーが「二重経済論」の一方である「非資本主義経済」の理解者であったと述べてはいるが、ヒンドゥー社会の職業集団とされるジャジマーニー制度や、それをヒンドゥー教に基礎をもつ社会の四区分「ヴァルナ」varna などについてはほとんど語らないままであった。確かにインドネシア社会が１５世紀前後にヒンドゥー教からイスラムへと移行してしまったために、ブーケは村落共同体における宗教の重要性を指摘はできても、それがヒンドゥー教なのかイスラムなのかまで、具体的に指摘できなかったのは致し方がないと言い得る。だが、最初に指

摘したように現代の「アジアの時代」が、ただグローバル経済でもって語られただけなら、安心・安全どころか不安定な社会経済でしかないが、ヒンドゥー教のような宗教文化を基盤とする、善悪の社会規範のあるインドの社会経済は持続可能性を秘めているので、これを吟味することがどれだけ大切かはそれこそ計り知れないと思われる。

周知のことであるがインドでは、現世的特徴を持つヒンドゥー教が、単に経済活動だけでなく人生のすべて、つまり生まれてから死ぬまでというより、前世や後世までをトータルに考慮する「法（ダルマ）」dharma が基盤となり、持続性・永続性のあるインドの村落共同体が形成されてきたし、また現在でもそうなっている。それを成り立たせる要因として、第一は、この「法」を支えているのは伝統や慣習であって各人の自由意思ではなく、村落共同体の保持が各人の義務となることである。つまり人は、輪廻転生の中に生まれるが、それからの「解脱」moksa が究極的には大切で、その「神に至る道」が教義上三つに制度化されている。それは「知識（ジュニャーナ）の道」jñāna-yoga、「行為（カルマ）の道」karma-yoga、そして「献信（バクティ）の道」bhakti-yoga である。第二に、人生に「四目的（プルシャールタ）」purusārtha があり、それらはヴァルナごとに生活の中で具体化される。その四目的とは、①富財の享有や取得に関する「実利（アルタ）」artha ②家族維持には欠かせない性的欲求と審美的衝動を扱う「性愛（カーマ）」kāma ③人の衝動や欲望に委ねることを防ぐ「法」 ④「法」によって欲望の制限と最終目的とする「ブラーフマン」との一致である。第三は、現実の生活は自然の生成や循環と一致したものでなければならず、春夏秋冬の四時のように人生を四区別し、各段階に応じた生活を図ることである。①人格的・倫理的生活の習得や知的準備と修行生活である「学生期」brahmacarin ②法の遂行と家族の永続、そして社会的歓待の作法などを充実させる「家督期」grhastha ③学問と祭りを継続し森林の中で家族や地域の福祉の追求をする「林住期」vānaprastha ④ヒンドゥー的人格の完成とその慈悲心から社会奉仕などを実践する「遊行期」samnyāsa を生涯を通して段階的に行う。第四は人々の生活を確立させるために、すべての人が仕事として職業を持たなければならず、村落共同体内に職業集団としてのジャジマーニー制度があり、家族だけではなく地域を社会経済的に成り立たせ、同時に人々の現実的な生活を持続可能なものとする。これらのヒンドゥー教がもつ四要因は、それらが相互に関連し合ってインドの社会経済を構造化しているが、しかしどの一つにとっても他が不可欠な社会規範を構成しており本来は一体的である。

以上議論してきたように、まずブーケの「二重経済論」は、「アジアの時代」を社会経済だけでなく文化や宗教までを含めた持続可能性を考える際に、非常に示唆に富む議論である。というのも、近代西欧でスタートした工業化や市場化の進展のみでは、安全・安心な社会

経済どころか、例えば個人が自己の利益を求める Gesellshaft ではテンニースの指摘ではないが、安定的な永続性など期待することは、現代であっても出来ないからである。彼が指摘するように経済や文化、そして宗教までを基礎とした持続可能な「村落共同体」は、家族や地域で生活する人々の「本質意思」から、歴史的に伝統や習慣によって自然につくられてきた Gemeinshaft だからである。また、ブーケの議論を現代の経済発展しているアジア、とりわけ人口大国のインドにおいて二重経済を考えることが非常に大きな意味を持つのは、これを現段階から考慮しなければ、インド人だけではなく地球上の人類は存亡の危機に瀕することになるかも知れないからである。現在の工業経済と市場経済を中心とする経済発展が、かつて先進国がそうであったように、インドの豊かな自然や風土が生み出す「食」、そこに生まれる土地や自然資源に適応した「職」、いたずらに環境破壊などをしなくとも済む自然に従った生活、あるいは家族や地域の中で相互支援・配慮がなされる福祉などが埋め込まれた「村落共同体」を解体したり崩壊させたりしてしまうのだろうか。そして、このインドの社会経済が二重経済となって維持されるためには、やはりヒンドゥー教の四要因でもって基礎づけられなければならない。というのも、どんな社会経済でも文化の中心にある宗教は、われわれの行為に善悪の判断基準を提示するだけでなく、これを基にした生活に意味づけないし価値づけがなされるからである。

【参考文献】

・Boeke;J.H.;(1953)*Economics and Economic Policy of Dual Societies as exemplified by Indonesia*〔『二重経済論』永易 浩一訳, 1979, 秋薫書房〕

・Kapadia;K.M.(1958):*Marriage and Family in India*〔『インドの婚姻と家族』山折哲雄訳, 1969, 未来社〕

・Dumont,Luis;(1970) *Homo Hierarchicus: the Caste System and its Implications*.〔『ホモ・ヒエラルキクス－カースト体系とその意味』田中雅一・渡辺公三訳, 2001, みすず書房〕

・Chaudhuri,Nirad C.; (1979) *HINDUISM: A Religion to Live By*.〔『ヒンドゥー教』森本達雄訳, 1996, みすず書房〕

・Bennholdt-Thomsen, Veronika;(1994) *JUCHITAN－STADT DER FRAUEN*〔ヴェロニカ・B・トムゼン〔『女の町フチタン――メキシコの母系制社会』加藤耀子他訳, 1996, 藤原書店〕

・Dasgupta, Ajit; (1996) *Gandhi's Economic Thought*〔『ガンディーの経済学―倫理の復建を目指して―』石井一也監訳, 2010, 作品社〕

・武井昭(2003)『現代の社会経済システム』日本経済評論社